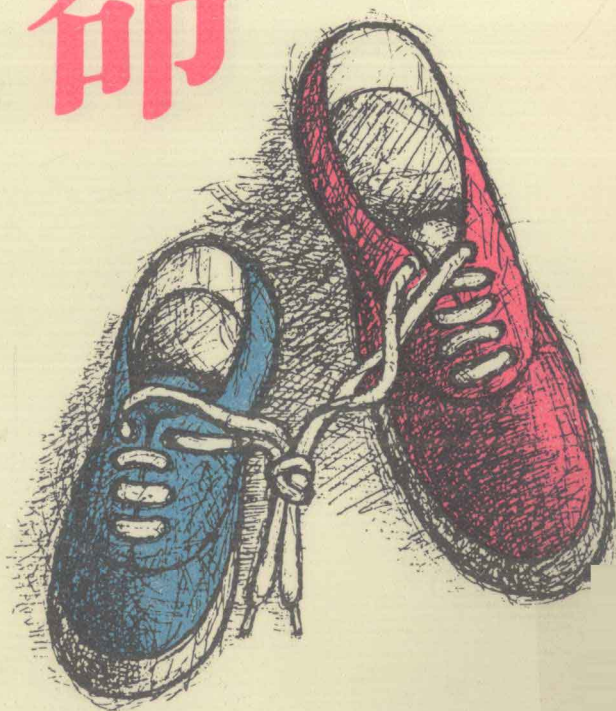


横田清子

腎臓移植
母から子へ

この命 みつめて



横田清子

腎臓移植
母から子へ

この命 を みつめて

構成・小澤則夫



腎臓移植—母から子へ
この命みつめて

定価 980 円

発行／昭和59年10月23日初版

著者／横田清子◎

発行者／石原明太郎

発行所／株式会社国際情報社

●150 東京都渋谷区恵比寿 1-29-25

☎(03) 442-2811 (代表)

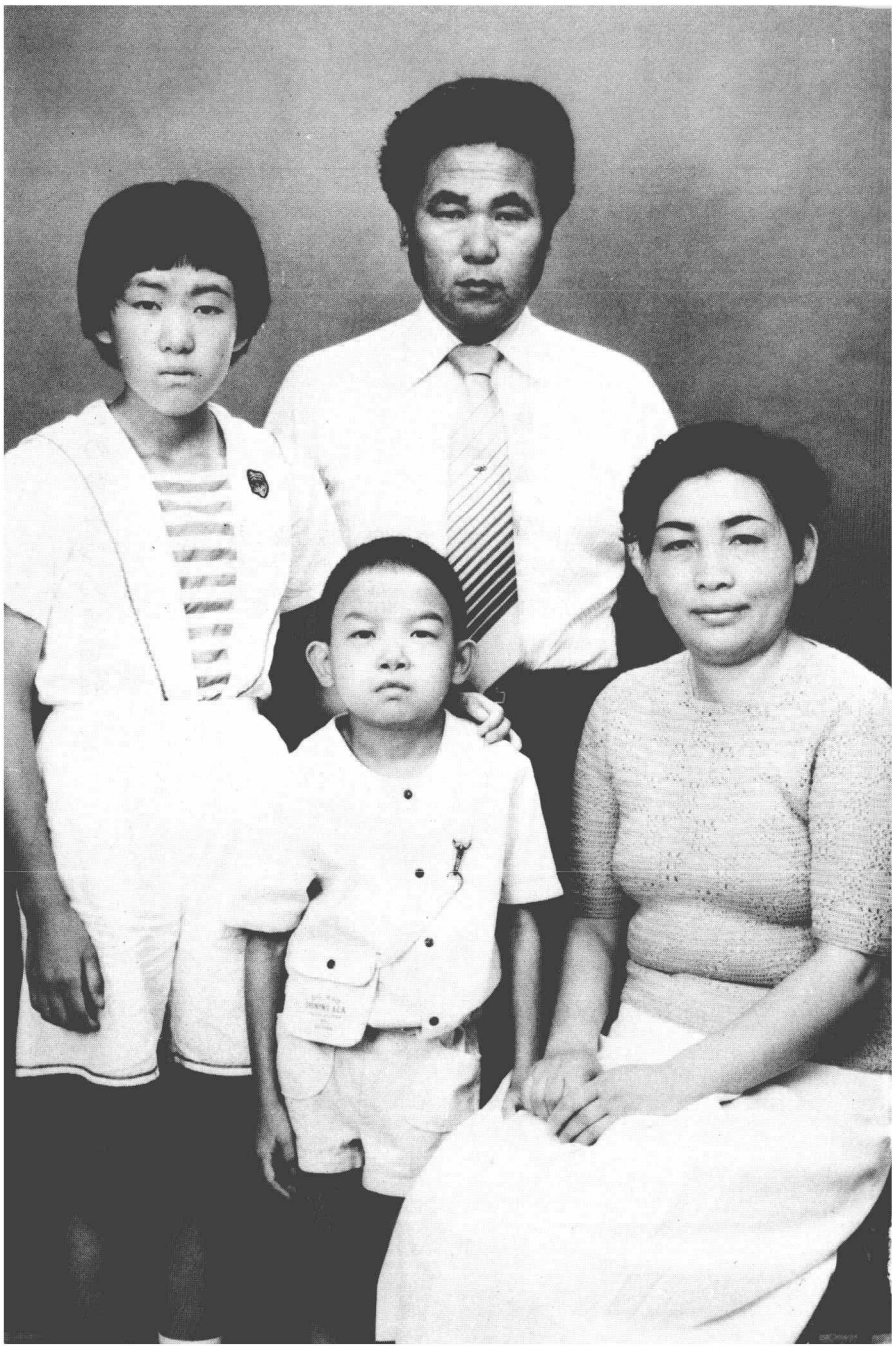
振替／東京 1-4500

印刷／国光印刷株式会社

製本／株式会社若林製本工場

落丁・乱丁本は、送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-7717-0125-3 C0095 ¥980E Printed in Japan 1984



この命みつめて ■ 目次

第一章 歩行器

なみだ 6

夜の絵 6

ちゅうしゃ 16

空白な思考 17

てがみ 27

笑い 28

第二章 宣告

しんぞう 40

勝へ—— 40

清瀬小児病院 41

かぜ 51

腎不全 51

ドア 62

透析 63

たいくつ 73

姉と弟 74

はな 85

水と自転車 85

第三章 移植手術不可

ぼくのゆめ 96

期待 96

しぬのはいやだ 106

花 107

夢 117

二人 117

雨 129

手術不可 129

六びょうとう 139

ゆきこの死 140

第四章 雪の日

ともだち 152

海 152

まど 161

振子 162

うんどう 171

乳房 172

ひとつのじんぞう 180

冬のスイカ 181

ないしょ 190

絶対安静 191

ゆめ 203

健康 203

腎臓と移植について 長谷川 昭 215

あとがきに代えて 222

第一章 步 行 器

なみだ

ひとつまたひとつ、なみだがおちる

いたくもつらくも、かなしくもないのに、

いま、とつてもしあわせなのに、

なみだがおちる

ふしぎなめ、なみだがほおにつたわって

くしゃくしゃな、ぼくのかお

(編注・小学校三年生から四年生にかけて、腎臓移植手術のため東京都立清瀬小児病院へ入院していた横田勝が、母親・清子の与えた自由ノートに記した詩。原文のまま。以下同じ)

夜の絵

東京の北西、池袋。

国鉄線と西武池袋線、東武東上線の私鉄二線が、巨大なターミナル駅を構築している。私鉄のひとつ、東武東上線の、川越市行きあるいは森林公園行きの準急電車は、東京のはずれの街、成増まで停車しない。この駅で東京の名残りを捨て、東上線は埼玉県に入る。そこから先は、各駅停車である。和光市、朝霞市、志木市。ほぼ、停車することにより行政区画が変わる。

成増を過ぎたあたりから、沿線の風景も変わる。時折りのびやかに畑が広がる。点在する雑木林。川。新興住宅地を通る。線路ぎわの、アパート。また、畑があつて、中層マンション。ベランダの洗濯もの。家の前に放り出された、三輪車。子供と手をつないで、買いものに行く主婦。また、住宅のまっ白い壁。洗濯もの。ベランダには観葉植物。そして、駅。駅を中心とした周辺には、大規模スーパーマーケット。喫茶店。ブティックの出店。駅前の空地には、自転車の群れ。バス。駅構内の有刺鉄線に、コスモスの花。

そして、鶴瀬駅。池袋からは準急電車で、二十五分の所。ここは、行政地図で見ると埼玉県富士見市である。

鶴瀬駅周辺は、華やかさが無い。三分も歩けば、ささやかな商店街は跡切れ、野菜畑を見ることが出来る。畑の向うには、白い壁の住宅。テニスコート。マンション。道路に沿って、黒ずんだ土地っ子の商店。昔からある酒屋の角を曲ると、私たちの家だ。駅から、徒歩五分とかからない。家の前には、手入れの行き届いた植込み。プレハブの作業場には、材木が積み重ね

である。

こことは、私たちの家であると同時に、夫・横田征幸まさゆきの仕事場、横田工務店の本拠でもあるのだ。家の二階が事務室になっている。私はここで、工務店の事務を担当している。気どらずに言えば、工務店のおかみさんが、夫の仕事を手伝っているのである。

子供は、二人。長女・利恵子りえこと長男・勝まさる。私は、この子たちの、母親。そして、征幸の妻。夜。

私たち四人は、いつも同じ部屋に固まっている。中学一年生になった利恵子に、勉強部屋を与えようとしたら、彼女、「何で私だけ除け者にするのォ」と、怒った。四人が、個々ばらばらになるのは、好きではない。寝る時も、四人一緒である。八畳の部屋。利恵子と勝は、二段ベッド。私たちはその下に布団を敷く。中学生となった利恵子は、夜遅くまで勉強するようになった。彼女が起きていると、私たちは眠れない。電気の明りが、気になる。朝は、早い。だから、独立した部屋を与えようとしたのに、彼女は「いやだ」――。

娘は、どこまで判っているのか、

「たまには、お父さんとお母さん、二人っきりにしてあげるね」

と、ませたことをいう。

私たちは、お風呂も、四人一緒に入る。八十キロもある、夫。まだまだ幼さが抜けない体の

娘。そして、小学校四年生なのに幼稚園児のように小さく、腕も脚も細い長男の勝。五十九キロ、そろそろ中年ぶとりを気にしなければならなくなった、私。裸の四人は、ふざけあい笑いあって、ひととき狭い浴室でたわむれる。

私には、左背中から下腹にかけて、三十センチほどのメスが走った痕がある。勝の細い体にも、腹部に半月形に走る手術痕がある。彼にはほかに、腕や両脚に、痛々しいほどに手術の痕跡をとどめている。

私の手術痕は、人体に二つある内の、ひとつの腎臓をとり出すためにできた傷である。勝のそれは、私からとり出した腎臓が、彼の体内に納まっている証である。全員でお風呂へ入る習慣が生まれたのも、四人がひとつ部屋で寝^{やす}むようになったのも、すべてが勝の腎不全のためなのだ。逆ないい方をすれば、彼の不幸な病気が、四人をひとつに引き寄せたのである。

おそろしく無口で、ぶっきらぼう。それでいて時々、ぼつりという冗談がおかしく、温かみのある横田征幸と、平凡な見合いのはてに結婚したのは、昭和四十五年十月であった。夫は三十歳。私、二十六歳。早婚が当然のような世間の風潮に逆らって、お互い「余り者同士」と笑い合っ^あての結婚であった。

私の実家は、婚家の横田家からは車で十分ほど、川越の農家である。兄が結婚し、農業を継

いでいる。私は、池袋にある某銀行に勤めていた。

横田家は、現在の地に永く続いた家である。夫の征幸で三代目。結婚当時の横田家には、明治四十三年生まれの舅と、大正三年生まれの姑がいた。私としては、それを覚悟の上の盃ごとであった。舅は、一人大工から昭和三十六年に横田工務店を興した人である。埼玉県のA級指定業者というランクにまで会社を引き揚げ、長男・勝が生まれた昭和四十九年当時は、年商二十億円もの仕事を請負っていたやり手だ。

夫は、その父の片腕として、結婚当時は営業を担当していた。お世辞なんて間違ってもいいそうにない夫が、営業担当。「現場の方が、なんぼ楽かなァ」とぼやきつつ、背広にネクタイ姿でお得意先を廻り、つきあい酒のはての帰宅は、いつも深夜と決まっていた。私とて、新婚の甘さを期待していたわけではない、それにしても、連夜の酒には腹が立った。一カ月、二カ月後であったか、

「おい清子、いくら商売柄、酒はつきものとはいえ、こんなんじゃァ、しょうがねえよ。かまわねえから、お前、征幸をやっつけてやれ」

ありがたい、舅のお言葉をいただいた。

その夜以来、酔って帰った夫を眠らせず、無理矢理起こしておいて、愚痴をならべた。そんなことで止む、夫の酒ではない。彼は、消防団で酒の修業を積んだ身だ。たかが新婚の妻の説

教ぐらいではこりなかった。

長女が生まれた後のことになるが、したたかに酔って帰った夫に「そんなに飲みたいなら、飲ませてやる」と、ブランドーの瓶を逆さにして、夫の口に突っ込んだ。妻の、反撃。むせたり吐いたりしつつ、あきれたことに夫はそれでも飲んだ。夫は翌日、当然その報いを受けた。天地が逆さになったような、強烈な宿酔い。同情なんかしてやるものか、と私。反撃は成功した。以来、夫の深酒は止んだ。私の、勝利。その夜、夫の口に押し込んだ芳醇な香りの液体は、いまだに残っている。夫にとっては、やや苦い、私にとっては快いその酒に、二人は「思い出酒」としゃれたネーミングをして、保存している。

夫の名誉のためにつけ加えるならば、現在はビール一杯で眠くなってしまうほど、酒には弱くなった。むしろ「思い出酒」のために酒を断った、ということではなく、長男の予期しなかった、長期にわたる入退院の日々の重ねの中で、夫は次第に好きだった酒を遠避けて行ったのである。

話は、もどる。

やがて、妊娠。

夫は、たいへん記憶力のいい人である。その日の天気やできごとを、ちゃんと覚えているのだ。一方の私は、月日のカーテンに遮られると、過去のできごととは紗がかかったように、その

ふちどりさえはつきりしない。たいていの母親は、子供を何人産んだところで、一人一人、産んだ時の前後の状況は明確に記憶しているものだが、私ときたらたった二人しか産んでないに、その前後の事情が混線している。

つい最近まで、長男の勝を出産する時、夫は父親と二人で釣りに出かけてしまい、私はせない気持ちで一人分娩室に入った、と思っていた。夫に「行かないで」と、置き去りにされる辛さを訴えようとしたが、舅や姑の手前、その言葉を、呑み込んだ。その印象の方が強烈すぎて、ではその時産んだのが利恵子であったか勝であったのか、判然としない。

「俺は、勝が生まれた時は、事務所にいたもの。おふくろが、今度は男だつてと知らせてくれたんだ。俺は、嘘だろうといい返した記憶があるから」

嘘だろう、と夫がいったのは、二番目の子もてつきり女の子だ、と勝手に思い込んでいたのである。何しろ彼は、姉二人、妹二人には生まれた横田家の長男であるから、家系の流れを見ても、男であるはずがないと決め込んでいた。

——ということとは、置き去りにされたのは利恵子を産んだ時だ。いずれにしても私は、出産当日、夫に放置されたのである。

長女・利恵子、昭和四十六年九月二十四日誕生。三五二〇グラム。

昭和四十九年十月七日。長男・勝、誕生。二五六〇グラム。その日は、快晴。庭で、建築資

材をトラックに積み込む作業を手伝っていたら、にわかに産気づいて、予定より二十日も早い出産であった。布団をとり込み、実家の母親に三歳になった利恵子を託し、自分で荷物をまとめての入院。即、出産。

勝は、この世に生を受けてから二十日間、保育器の中で過ごすことになった。私は二十一日間、実家で休養をとった。実家には、勝より一カ月早く生まれた兄の長男がいた。私は、張ったお乳を勝の従兄弟となるその子に、たっぷりと飲ませた。しかし、横田家にもどると、お乳はふつりと出なくなった。勝は、かわいそうに母の乳の味を知らずに育つことになった。

勝の脚の開き方が、どうもおかしい。

それに気がついたのは、十一月初旬のことである。勝を出産した産婦人科からは、「男の子だから、関節が固いんだ」といわれていた。でも、何か変だなあ、と思っている内に、年末である。

当時、舅と夫は、近隣の市の小学校建設で多忙であった。職人さんやお客さんの出入りも激しく、あわただしい年の瀬を迎えた。舅は、恒例の、一人旅。年末から年始にかけて、舅はふらりと旅行に出る。行く先も告げない。結婚当初は、びっくりした。夫は慣れているせいか、心配もしない。舅が、落ち着き先から電話を寄こすと、初めて「あ、今年は熱海へ行ったんだな」と判るしくみである。

五十年二月に、勝を某病院へ連れて行く。「股関節脱臼ですよ、奥さん」医師（先生）の言葉に、私

の胃は鉛でも飲み込んだように、重くなった。二月、三月と通院し、やがて四月から六月の花の季節に、二カ月入院する。私たちにとって、あまりいい思い出のないその病院で、たったひとりで笑える材料があるのは救いだ。主治医は、退院するまで勝を女の子の子と思い込んでいたのだ。それほど彼は体も小さかったし、かわい顔をしていた。

六月にいったん退院し、再び八月から九月、暑い盛りの二カ月を、勝は入院して過ごした。

「もう治りましたよ」といわれて退院して、数日後に勝は満一歳の誕生日を迎えた。私たち夫婦の心配ごととはこれでとり除かれ、勝の誕生日も久しぶりの笑いで過ごすことができた。その一方――。

「お宅の利恵ちゃんの絵なんですけれど……」

幼稚園の保母（お母）に、娘の利恵子が描いた絵を見せられて、驚いた。画用紙全面に、黒い絵の具が塗りたくられていた。ある部分は、乱暴に筆が走り、ある箇所はいいねいに塗りつぶされていた。利恵ちゃんは、夜の絵を描いたんだといってましたけど、保母は明らかに当惑した表情。私だって、言葉が出なかった。

「どんな絵を描かせても、黒っぽい絵を描くんですよ」

保母は、ためらいがちに告げる。